て運用する方針をとっている．(ECMWF の存在する欧州でも，主要センターは全球モデルを運用している．) その理由はこれらのモデルがそれぞれの特徴をもち，多様なユーザーに適切な情報を最も効果的，経済的に提供できるものだからである．

### 3. 感想

以下，いくつかの感想をのべたい．

●気象技術の国際的移転の促進は WMO の1つの重点項目であり，このシンポジウムの狙いの1つであったが，結果として参加者，特に研究発表者の多数は“数値予報先進国”からの出席者であった．もっと“数値予報開発途上国”からもいろいろな話題提供があれば良かったと思われる．

●多くの参加者の感想であるが，前回 (1968) の主要メンバーの多くの方々がすでに引退され，世代の交代が感じられた．この分野でも次の世代の人材の投入が不可欠であると痛感された．

●数値予報システムが巨大化するにつれ，改良・開発の仕事も複雑になり，ある意味では工学的となって来た．それだけに，正確な理学的な方向づけが大切と思われる．このためには，気象力学や，観測にもとづく現象の理解等，幅広い気象学による支援が必要で，この点日本では問題があるように思われる．なお，開発には，“石橋をたたいて渡る”慎重さが大切であるが一方では新しい成果を大胆にとり入れる積極さも必要で，特徴ある開発研究グループの共存・協同が必要と思われる．

●日本からは比較的若年層 (?) からの発表が多く，よく準備された発表が多かったが，使用言語のハンデがあり，やはり討論への参加 (特に総合討論では) が不足していた．今後の課題として特に若年層の活躍を期待したい．

●気象学関係の多数の研究集会が世界各地で開催されているが，日本での開催はまだ少ない．国際協力の観点からも，日本の気象学・技術へのインパクトの点からも，若手研究者・技術者の国際的交流のトレーニングの場としての点からも，可能なかぎり数多くの集会を日本で開催したいものである．

心配された会場の過密の問題では参加者にがまんしていただいたが，各セッションでの講演，質疑応答，討論は活発になされ，ポスターセッションでも展示を前に熱心な議論が行われた．コーヒー・ブレイク，昼休み，レセプションの席でもさまざまな交流・意見情報交換がなされた．出席者の多くから，各分野の最新の開発研究の成果が発表され有益な情報交換の行われたことに満足の意が表され，この大きな国際シンポジウムを円滑に運営した気象庁に謝意がよせられたことは，事務局担当者にとっても嬉しいことであった．

シンポジウムに協力，参加された気象庁，および気象学会のかたがたに厚くお礼を申し上げ，報告を終わりたい．

---

## IUTAM シンポジウム「渦運動の基礎的様相」のお知らせ

(IUTAM Symposium on Fundamental Aspects of Vortex Motion)

**主　催**：IUTAM シンポジウム「渦運動」組織委員会
(委員長　今井　功)

**開備日**：1987年8月31日 (月)～9月4日 (金)

**会　場**：日本学術会議講堂 (予定)
東京都港区六本木

**連絡先**：〒113 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学理学部物理学教室内
IUTAM シンポジウム「渦運動」事務局
神部　勉
TEL. 03-812-2111　内線 4188